

氏名(本籍)	おかのりこ 岡典子(埼玉県)
学位の種類	博士(心身障害学)
学位記番号	博乙第1848号
学位授与年月日	平成14年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	19世紀アメリカ合衆国盲学校における音楽教育の導入と展開に関する歴史的研究
主査	筑波大学教授 教育学博士 中村 満紀男
副査	筑波大学教授 博士(心身障害学) 鳥山 由子
副査	筑波大学教授 柳本 雄次
副査	筑波大学教授 博士(教育学) 福田 弘

## 論文の内容の要旨

### 1. 論文の概要

#### (1) 目的と方法

本論文は、1830年代初頭、慈善的教育施設としての盲院が、19世紀末に公的教育機関としての盲学校へ発展した過程について、盲人の主たる職種として期待されていた音楽の教育上の展開とその諸条件の観点から検討した。検討対象として、ほぼ同時期に開校したパーキンス盲学校、ニューヨーク盲学校、ペンシルヴェニア盲学校の最古の歴史をもつアメリカを代表する3校を設定した。主な資料として、これら3校の年次報告を中心に、全米盲教育者会議(American Instructors of the Blind)ならびに全米盲教育者協会(American Association of Instructors of the Blind: AAIB)会議録を利用した。

#### (2) 構成と要約

本論は三章構成とした。第一章では、教育による盲人の経済自立を最大目標として盲院が創設された1830年代初頭から、最初の教育成果として卒業生の就業がどの程度達成されたのかが判明する1850年代初頭までについて検討した。第二章では、アメリカ社会において文化、教育、さらには産業としての音楽が急速な発展を遂げ、盲院の音楽教育にも新たな対策が求められ始める1870年代初頭までを検討の対象とした。第三章では、盲院が盲学校へと発展を遂げた19世紀第4四半期において、音楽教育が従来の一元的な職業教育から、人間発達の一手段としての広範な基礎教育、さらにそれを基盤としたより高次の職業教育という段階的機能を確立するに至った要因を明らかにし、盲学校において目指された学校機能の強化が、教育の内実にいかなる影響をもたらしたのかを、音楽教育の立場から検討した。

本論文で究明された盲学校の発展に対する音楽教育の寄与は以下の通りである。

- ①盲院創設の最大目標であった盲人の経済自立の実現とその個人的・社会的意義である。当初の期待には遠く及ばなかったものの、盲人が教会オルガニストや音楽教師として就業したことは、盲人本人に経済的基盤や自持・自尊の精神をもたらしたばかりでなく、盲院教育の成果を正当づける重要な社会的根拠となった。音楽教育は、恒久的貧民としてのスティグマから盲人を解放し、彼らを晴眼者と同等の社会構成員へと昇格させる盲院教育構想の象徴であった。
- ②卒業生の音楽家としての活躍、ピアノ調律、あるいは生徒による公開演奏会の開催等を通じて形成された盲

院教育への社会的関心の高まりである。なかでも19世紀後半以降、盲人の重要な職種となるピアノ調律の教育成果は、音楽界のみならず、ピアノ製造会社や市教育委員会に対して、職業自立を超えた盲院の存続意義を示すことになった。また、ピアノ調律教育の確立は、音楽家としての就業が困難さを増しつつあった盲院にとって、20世紀における盲学校発展の布石となった。ピアノ調律教育の成功は、盲院校長の教育構想に基づいてだけでなく、それを実現する社会状況の存在、すなわち、同時代のアメリカにおける急速な工業化を背景とするピアノ製造の大量生産化と低価格化、音楽の社会的需要の発生を、盲院と盲人が最大限に享受できたことに基づいていた。しかし工業制生産による生産過程の効率化と安価な労働力としての移民の流入は、盲院時代から盲人の主要な職種であった手工を圧迫することになり、新たな就業問題を発生させることになる。

- ③高等教育ないし高度の専門教育の機会の必要性に対する盲学校関係者の意識変革である。音楽教育においては、より長期にわたる教育が不可欠であるとの認識から、1860年代末以降、各盲学校が推進した音楽の卒業後コース（上級クラス）の整備は、19世紀末に幼稚部が設置されることにより、卒業後コースまでを含む一貫制教育システム構築の先駆となり、1880年代後半以降、全米盲教育者協会会議の重要な議題となる盲人大学設置論に対しても、間接的根拠を与えるものとなった。
- ④今後の議題として、に盲学校卒業後の盲人の生活実態とそれに対する社会的評価と対応、財源・人・音楽の資源に乏しかった3校以外の他の盲学校における教育の実態、さらに、音楽教育の位置と意義に関する「精神薄弱」等の他障害との比較検討が期待される。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の特長は、第一に、盲院から盲学校への発展に対する音楽および音楽教育の寄与を、相互関連的に究明したこと、いいかえれば要保護状態から社会自立への盲人の昇格における音楽教育の役割を解明したこと、そのような音楽教育の成功を、盲院・盲学校の校長等による言説のみならず、社会における変化、とりわけ、大量生産によるピアノの低価格化、音楽需要の高まり、そして有利な音楽教育環境等と関連させて究明したことにある。第二に、このような解明を、系統的な資料に基づいて提示したことである。先行研究では、間接的な資料によって示唆されていたことが、本論文で豊富に駆使された年次報告および盲学校教員会議議事録によって明示された。

しかし問題点は、音楽教育の成功を享受できた盲学校生徒の範囲、卒業生の就労や生活の状況、同時代の他地域における盲学校の状況との比較がなされていないこと等、指摘できるが、これらは今後の課題としてその解明を期待したい。

よって、著者は博士（心身障害学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。